

カザフスタンの私立大学の量と質

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 龍子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00028088

カザフスタンの私立大学の量と質

佐藤 龍子（龍谷大学 農学部）

要約：

カザフスタンはソ連崩壊後の1991年12月に独立した。「ソ連邦の解体によって、いわば受け身的に独立させられた側面を有している」（嶺井, 2012）。独立後私立大学が増え、2001年頃ピークになり、その後私立、国立ともに減少した。2018/2019年は128大学（国立45. 私立79. 外国支店大学4）である（カザフスタン共和国統計局 HP. 2019.12.1 閲覧）。なぜ、急増後、急減していったのか関心を持った。

筆者は2019年10月上旬、同国最大の都市アルマトゥ市の大学等を訪問。私大が増加し、なぜその後減少していったのか等をヒアリング調査した。本稿ではヒアリング等をもとに、カザフスタンの私立大学について論じる。

キーワード： カザフスタン, 私立大学, 急増と急減, アクレディテーション

はじめに

カザフスタンはソ連崩壊後の1991年12月に独立した。嶺井（2012）によれば「中央アジア諸国の独立は、かつて同じようにソ連邦を構成していたバルト三国やコーカサス諸国が独立を熱望して達成した事情とは異なり、ソ連邦の解体によって、いわば受け身的に独立させられた側面を有している」という。

中央アジア5か国（旧ソ連諸国のうちカザフスタン、キルギス、タジキスタン、トルクメニスタン、ウズベキスタンの5か国）のうち、同国の独立は遅かった。独立後私立大学が増え、2001年頃ピークになり、その後私立、国立ともに減少した。2018/2019年は128大学（国立45. 私立79. 外国支店大学4）である（カザフスタン共和国統計局 HP. 2019.12.1 閲覧）。なぜ、急増後、急減していったのか関心を持った。

カザフスタンは資源大国として近年注目されている。外務省の「対カザフスタン国別開発協力方針」（平成29年4月）では、カザフスタンは、石油、天然ガス、ウランなどの豊富な天然資源に恵まれ、中央アジア諸国の中で最大の経済規模を有しており、一人あたりの名目GDPも11,580ドル（2016年）と比較的高いと述べている。一方で、同国はインフラの未整備、市場経済を支える人材の不足、地域間の経済格差、環境汚染などの問題を抱えている。我が国のカザフスタンへの支援は、これらの問題への対応を強化し、持続的成長を後押しするのみならず、我が国の資源エネルギーの安定的確保及び供給源の多様化という観点からも意義がある。また、カザフスタンへの支援は、中央アジア諸国の経済発展と地域内協力の促進を通じた地域全体の安定にも寄与することが期待されると記載されている。

岩野ら（2019）によれば、中央アジアの中でもカザフスタンが注目されているのは、ユーラシア大陸の中でロシア・中国に隣接する地理的な位置、国土の大きさ、豊かな天然資源にあると述べている。さらに、旧ソ連圏の歴史的・文化的経緯のなかで生じたイデオロギーとアイデンティティの葛藤を超えて、世界を二分する政治的経済的体制の狭間でロシア・中国側とアメリカ・ヨーロッパ側の双方に配慮しつつ、同時にカザフ人の国としての国民国家や国民意識の醸成を図ろうとするプロセスが、ナザレバエフ大統領に

よる長期政権のもとで約 30 年間にわたり比較的「安定的に」実施されてきたと分析している。

なお、CiNii で「カザフスタン」と検索すると 836 件ある (2020.10.23 閲覧)。ここ 10 年ほどで大学教育の論文も数件あるが、教師教育、英語教育等である。私立大学や大学の規模等を扱った論文はない。

筆者は 2019 年 10 月上旬の約 1 週間、同国最大の都市アルマトゥ市の大学等を訪問。私大が増加し、なぜその後減少していったのか等を中心にヒアリング調査した。そのなかで、量の増減からア krediteーション制度による質保証の時代を迎えていることがわかった。国の成立や背景、文化など異なる点が多いが、ヒアリング内容は日本の高等教育にも示唆を与えるものだった。本稿ではヒアリングをもとに、カザフスタンの私立大学について論じる。

1 カザフスタン共和国の基礎データ



図 1.

面積：272 万 4900 平方キロメートル (日本の 7 倍、世界第 9 位、旧ソ連ではロシアに次ぐ)

人口：1,860 万人 (2019 年：国連人口基金)

首都：ヌルスルタン (旧アスタナ) ¹⁾

民族：カザフ系 67.8%、ロシア系 19.32%、ウズベク系 3.21%、ウクライナ系 1.47%、ウイグル系 1.47%、タタール系 1.10%、ドイツ系 0.97%、その他 4.5% (2019 年：カザフスタン国民経済省統計委員会)

言語：カザフ語は国語 (ロシア語が公用語)

宗教：イスラム教 70.2%、ロシア正教 26.3%、仏教 0.1%、無宗教 2.8%、無回答 0.5% (2009 年：カザフスタン国政調査)

在留邦人数：174 人 (2018 年 10 月外務省)

在日当該国人数：415 人 (2019 年 6 月法務省)

以上、外務省カザフスタン基礎データ (含む図 1) より。

日本の 7 倍以上の面積を有しており、広大である。世界最大の内陸国である。ソ連時代のいわゆる核の処分場、セミパラチンスク (現在はセメイ) は東部に位置している。ウランの埋蔵量はオーストラリアに次いで 2 番目に多い。豊かな天然資源に恵まれた国である。首都は北部のヌルスルタン (旧アスタナ) である。筆者が訪問したアルマトゥ市は人口約 180 万人、同国最大の都市で、東南部に位置している。広大なカザフスタンの、しかも大都市のごく一部の大学での調査であることをお断りしておく。なお、建国から 1997 年までアルマトゥ市が首都である。

JETRO の 2014 年データでは人口が 1,716 万人となっている。上述のように 2019 年は 1,860 万人で、5 年間で 150 万人増加している。実際の街の様子や現地で話を聞くと、若い人が多い国であると実感した。

2 カザフスタンの教育制度と大学数

ここでは、JETROの「カザフスタン BPO 層実態調査レポート」(2015) から引用する。

高等教育に関して、政府は国際基準に合わせた単位制度の導入を図るべく、2010年ボローニャ宣言に加盟し、国内60の大学が欧州大学大憲章に署名したことにより学位制が高等教育に取り入れられた。

学士：履修期間4年間

専門職資格：履修期間5年、学士より高等

修士：履修期間2年間、先進国の制度にほぼ対応

博士：履修期間5年間

現在135の大学が単位取得可能な専門技術科目を設けており、38大学が学士と修士の学位を、42大学が遠隔教育課程を設けている。また16大学が欧州等の大学の協力を得て博士課程を準備中である。医師、獣医、軍人などの専門職業従事者は学士等の学位ではなく、専門家の資格が与えられる。

高等教育が抱える問題として、専門教育のレベルの低下があげられる。大学を卒業しても必要な専門的知識・技能を身につけていない学生が多く、産業界で人材不足が生じている。(自分が学んだ専門分野で職に就ける学生は30%に過ぎない) 背景・課題の1つとして、私立大学の増加がある。私立大学の増設(2012年では146校の約半数が私立大学)により、各校間で学生獲得競争が熾烈となり、学費を値下げする大学も増えた。学生数に比べ大学数が多い状況では、学生が足りず、財務状況は悪化し、大学は教育内容の改善に取り組むことがおそろかになり、全体の教育レベルは低下することが懸念されている。

以上、JETROの「カザフスタン BPO 層実態調査レポート」(2015) から引用した。「各校間で学生獲得競争が熾烈となり、学費を値下げする大学も増えた」とあるが、日系企業のロシア系カザフ人にインタビューした際にも、同様の指摘があった。また、学生募集のために、企業に就職を依頼に来ることもあるし、依頼レベルでなく、就職先を「確保」し、それを学生募集のHPやパンフレットにあげている例もあるとのことだった。就職実績でなく、就職確保先を明記しているのである。

さて、カザフスタンの大学数の推移、学生数の推移は以下である。

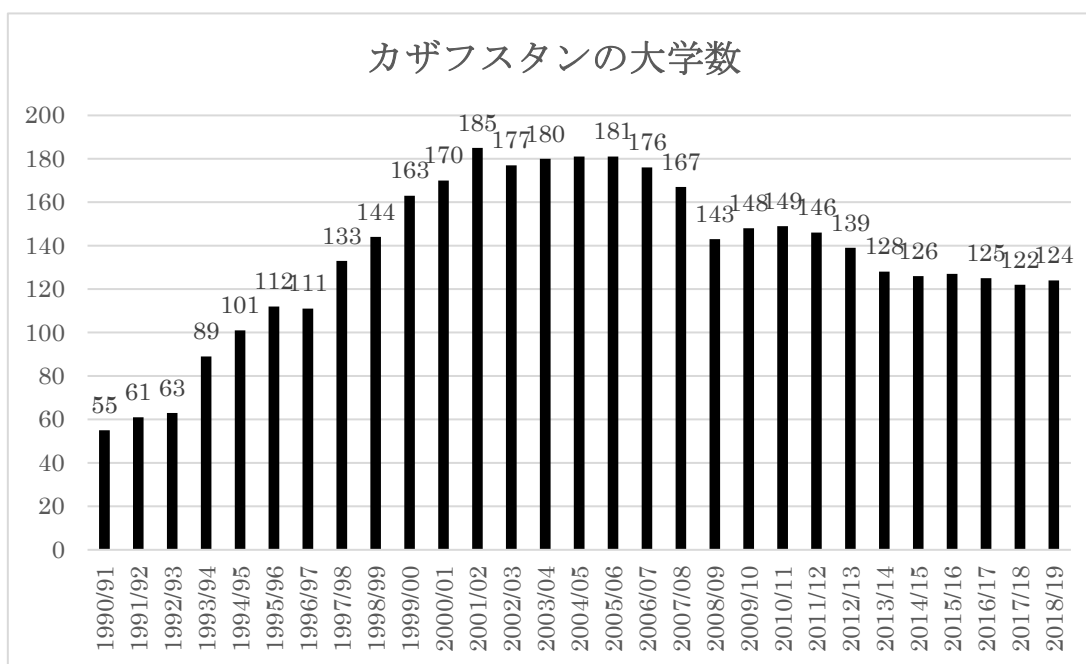


図 2.

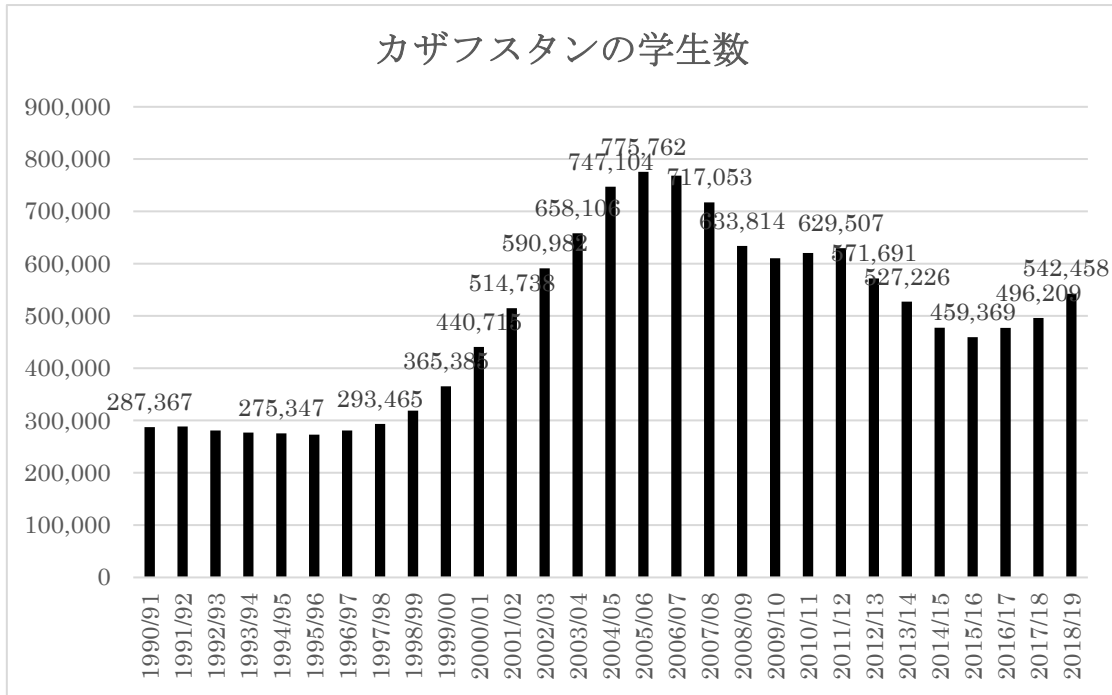


図 3.

図 2. 図 3.ともにカザフスタン統計局 HP (筆者グラフ化) ²⁾

大学数は 1990/1991 の 55 校から 2000/2001 までの 10 年間で急激に 130 校も増え、185 校になった。1990/1991 の 55 校から 3 倍強増えている。185 校でピークを迎え、その後 10 年で 2010/2011 までに 36 校減っている。学生数は 1990/1991 の 287,367 人から、2005/2006 に 768,442 人でピークを迎えている。2018/2019 は 542,458 人である。

ところで、今回、在日 10 数年のカザフスタン人に同行してもらい通訳していただいたが、彼はカザフ語、ロシア語、英語、中国語、日本語が堪能である。40 代の彼は、ロシア語教育を受けている。現地でのヒアリングはカザフ語、ロシア語、一部英語で行い、それを日本語に訳してもらった。ソ連時代の教育の影響で中高年の大学教員は、カザフスタン人でもロシア語が堪能である。カザフ語と英語教育に力を入れている現代では、若い教員や学生は英語が堪能である。大卒のカザフスタン人同士の会話は、カザフ語とロシア語を混ぜて話している。

3 現地調査から

2019 年 10 月 7 日～11 日、アルマトゥ市内の 5 大学 (国立 1、私立 4)、企業 1 社、ジャーナリスト 1 人にヒアリング調査を行った。主な内容は、独立以降の私立大学の増加と減少、現在の課題、評価 (アクレディテーション制度) などである。私大の 4 大学は、国際・語学系 1、経済・IT 系 2、医学系 1 である。なお、ヒアリングは基本的にロシア語かカザフ語で、前述のように日本在住 10 数年のカザフスタン人が通訳した。

1) 経済・IT 系私立大学の副学長 (評価担当) のヒアリングの一部は以下である。

私大は 1992 年以降急増した。主にビジネスマン、元政治家、元官僚などが作った。2000 年まで増加したが質が伴っていないので、教育科学省が認可制度を導入し、基準を厳しくした。増加した私大の約 80%が基準に合わなかった。うち約 40%がライセンスを取り消され、うち約 40%は自然減した。基準

に通ったら、学生1人あたり40万テンゲ、教員1人あたり60万テンゲの補助金がもらえる。認可制度や国内アクレディテーションのモデルはイギリスだろう。わたしも他大学から今年この大学に評価担当副学長として赴任してきたばかりだと語った。

この私立大学は2009年設立、現在学生約4,500人。現地の人に聞くと、新興大学だが、人気があるとのこと。なお、お話しを伺った副学長はイギリスの大学で学位を取得していた。英語が堪能であった。前任校は著名大学だった。

2) 経済系私立大学の学科長（評価担当）のお話の一部は以下である。

アクレディテーションについて、本学は国内と国際の両方の評価を持っている稀な大学である。大学単位と専門単位でそれぞれアクレディテーションを受けている。ほとんどの教員は、外国で学位を取得している。質保証のために、教員をクビにしたこともある。外国の大学に比べても高い水準の教育であると自負している。現在国からの補助金はゼロ、文系の学費は5,669USドルと高額である。いい先生を採用したいので、教員の給与は高い。カザフは若い国だから、国内基準だけではだめだ、国際基準に通らないとだめだ。ボローニャプロセスの基準や決まり事も守らないといけない。競争が激しく、国が規制を強化し、強い大学しか生き残れないようになっている。しかし、それで質が上がったとは思えない。なぜなら、紙やデータベースでは本当のことがわからないからだ。

当大学の学生の就職は非常に良好だ。インターンシップ（主に外資系、石油系など）にも力を入れている。しかし、もっとも優秀な学生は当大学の大学院に進学する。

この大学はソ連から独立した1992年に設立、著名な私立大学である。設立当初から私立大学である。当初は大学院のみであったが、その後学部もつくった。

3) 医学系私立大学の事務系幹部のお話は以下である。

当初、国立大学であったが、2014年私立大学になった。現在、株の20%を国が所有、80%はある専門学校（病院、研究所も設置）が持っている。国が20%持っているのは、医学系教育をコントロールするためだ。医学系はこの20数年、合併させられている。現在、医科大学は国内に8校。

学部生もいるが、多くは医師免許を取得済みである。大学の教員になるためか、自分の専門を決めるため、あるいは専門をスキルアップするためにきている。いわば、継続学習の機関である。学費は815,500テンゲ（日本円で約197,500円、2020.11.18レート）。眼科、耳鼻科、皮膚科、脳外科など31科ある。在学期間は耳鼻科3年、脳外科4年など科によって異なる。今まで、医師のスキルアップは海外で行われてきたが、現在は国内でできるようになった。現在、インド、ヨルダンなどから留学生も来ている。今後、英語の授業を増やしていく。

カザフスタンのアクレディテーション制度は2007年から、3～5年に1回受審する。国が決める。現在、HKAOKAとHAAPの2つの協会がある。従来はライセンス（認可）を取得すれば大丈夫だったが、2018年からアクレディテーションに通らないといけなくなった。書類の作成などとても細かい仕事がある。

4 考察

カザフスタンの私立大学は上記のように、急増のあと急減に転じた。急減した理由は、質の確保や質保証のため、もう1つは学生募集の厳しさのためである。前述のJETROの記載にあるように、学生数に比べ大学数が多い状況では、学生が足りず、財務状況は悪化し、大学は教育内容の改善に取り組むことが

おろそかになり、全体の教育レベルは低下することが懸念されているからである。一方、質保証のシステムとして、ボローニャプロセスやアクレディテーション制度がある。生き残った大学は積極的にこれらを活用し、アピールしている。今回訪問した大学は著名大学や医学系大学のため、自然にアクレディテーションの話になった。

カザフスタンに足場のない筆者は訪問前に私立大学を中心に 20 数大学、日系企業 10 社以上に調査依頼のメールを送付（大学は英語、日系企業の一部は英語）したが、事前に許可をもらえた大学は 1 校、企業 1 社だった。遠く日本から研究者がくることを不審がるメールや、調査目的や何に使うのか等を詳細にきく大学もあった。結局、現地で通訳やその知人を介したり、訪問大学から紹介してもらったりして、5 校に行くことができたが、著名な大学に限られてしまった。国の成り立ちや政治の違いもあり、調査を受け入れてくれる大学は、それなりに自信のある大学だとわかった。

カザフスタンにおける大学の負の面を一部紹介する。「2011～2020 年教育発展国家プログラム」が未だ解決できない問題として指摘しているのは、高等教育機関における汚職・腐敗の問題である。2005 年から全ての大学に対する認可制度と国家審査が導入され、当時 187 大学、52 あった国立大学は次第に淘汰されることになった（岩崎、2012）。

岡（2014）は、多くの大学や学校では、成績や試験の点数、学位論文をカネやコネで手に入れる行為が横行していると述べている。カザフスタン西部に位置するマンギスタウ州で、法務省の調査機関が 1990～2000 年代に卒業証書を取得した学校教師 200 名を調べたところ、そのほぼ 9 割が実際には大卒資格を持っていなかったという。カザフスタンの学校・大学における贈収賄は高度に組織化されており、教師の給与や学生の学習意欲といった、個々人の事情や態度だけでは十分に説明することができない。教育分野の不正が教育機関のみならず、行政機関をも含めたピラミッド型の腐敗システムによって生み出され、再生産されていることを指摘している。岡（2019）は、カザフスタンではカネを渡した見返りとして便宜を受ける行為は、ソ連崩壊後、特に 1990 年半ばごろから増大したというのが多くの人の共通認識になっていると指摘し、市場化の功罪を述べている。²⁾

滞在中、ジャーナリストにインタビューするとともに逆にインタビューを受けた。日本の高等教育の現状や少子化について、またなぜカザフスタンの大学に興味をもったのかなど調査目的や内容を聞かれた。その際、「いい大学の、いいところしか見ていない」と厳しく指摘された。確かにその面は否めない。今回の調査はいい大学の限定された部分だけになってしまった。急激な市場化と経済発展がもたらす負の側面を調査することはできなかった。

面談したほぼ全員が「カザフスタンは若い国だ」と言っていた。「日本は伝統ある古い国ですね」とも。若い国だからこそ試行錯誤し、大学の著しい増減があったこともうなずける。一方で、若いからこそ国内基準だけでなく、ボローニャプロセスや国際アクレディテーション制度を導入するなど、急速に変化していることもわかった。日本人にはあまりなじみのない国だが、私立大学の増減という現象面だけでなく、学生確保と就職先確保、国際化、アクレディテーション制度、人口増加など、示唆に富むものが多々あった。

高度に構造化された腐敗システムのなか、カザフスタンの私立大学が教育と学生の質を担保し、量から質への転換がどのようにすすんでいくのか、今後も注視していきたい。

引用文献：

岩野雅子、大場智美 2020 「日本とカザフスタンに見る大学教育改革：教育言語の英語化がもたらす未来」
『多摩大学グローバルスタディーズ紀要』 No. 12 52

岡奈津子 2014 「「点数・学位売ります」－カザフスタンの教育機関における不正とその構造」『アジア研ワールド・トレンド』 No. 299

岡奈津子 2019 『＜賄賂＞のある暮らし－市場経済化後のカザフスタン』 白水社 12,187,219

カザフスタン共和国統計局 HP : www.stat.kz (2019.12.1 閲覧)

外務省ホームページ (日本語) : mofa.go.jp (2020.10.28 閲覧)

J E T R O 「カザフスタン BPO 層実態調査レポート」 (2015)

嶺井明子、岩崎正吾編著 2012 『中央アジアの教育とグローバリズム』 東信堂 033,202,225

注

1) 「カザフスタンの首都名、前大統領の名前に変更」中央アジア・カザフスタンの国会は 20 日、カザフスタンの首都アスタナの名称を、ナザルバエフ前大統領のファーストネームの「ヌルスルタン」に変更する法案を全会一致で可決した (2019 年 3 月 22 日朝日新聞朝刊)。2019 年 3 月 26 日の日本経済新聞・春秋では、「60 年ほどの間で 4 度目の改名というから、なかなか忙しいことである。世界最大の内陸国カザフスタンの首都の名前が最近、ヌルスルタンになった」と報じている。

2) 表を筆者がグラフにした。グラフ化で、数字が重なって見えない (わかりにくい) 年度の数字を一部省略した。